

母子生活支援施設を退所した子どもの生活

Life of children who left maternal and child living support facilities

熊谷 良介（北海道大学大学院博士課程）

要旨：

本研究の目的は、母子生活支援施設を退所した子どもたちの退所後の生活における経験を、子どもの主体性に着目して分析し、子どもたちの生活にどのような制約があるのかを明らかにすることである。インタビュー調査の結果から、「お金のやりくり」、「家庭で担う役割」、「友人関係」、「将来に対する認識」という4つの側面について、子どもたちの行為と認識はどういった意味合いをもち、どういった制約があるのかを分析した。結果として、家計状況を考慮してお金を使う、親が担いきれない家庭での役割を引き受ける、という子どもの主体的な行動によって家庭の生活が維持されていた。しかしそれは、家庭の状況を考慮するという制約のもとでの行動とならざるを得ない。このことは友人関係の形成と維持においても、難しさを与えていた。また、将来に対する認識の形成においても他の側面同様、将来における家計状況や家族の生活を考慮したものとなっていた。

Key word：母子生活支援施設、家族、子ども、生活

I. 研究目的と背景

本研究の目的は、母子生活支援施設を退所した子どもたちの退所後の生活における経験を、子どもの主体性に着目して分析し、子どもたちの生活にどのような制約があるのかを明らかにすることである。母子生活支援施設は、児童福祉法に規定された児童福祉施設の一つであり、自立困難な母子世帯への就職支援や子育て・生活支援を含んだ、母と子それぞれ、そして母子関係に着目した自立支援が行われている。母子生活支援施設利用者の入所理由について分析した堺は、母子生活支援施設に入所する母子世帯は「住宅事情」や「夫の暴力」、「経済事情」、「児童虐待」といった多様な困難を複数抱えているとしている（堺 2013）。では、施設入所に至った母子世帯は施設利用後どのようにになっているのか。平成26年度全国母子生活支援施設実態調査報告書によると、退所世帯の在所期間6か月未満が16.7%，これを含む1年未満は31.7%，全体の74.4%は3年未満と

なっている。多くの利用世帯は3年で施設を退所し、そのうち半数近くは1年という短期間での施設退所にいたっていることがわかる。退所決定の理由を見ると、「経済的自立が高まったので」が17.9%，「住宅事情が改善したため」が14.7%であり、経済的な事情や住環境の事情の改善を伴わずに短期間での退所にいたっている利用世帯が一定数存在していることが考えられる。また、退所後の住居形態を見ると、71.4%が単独の母子世帯として暮らしており、母親による子育てと労働の両立が必要である母子世帯がほとんどである。以上のことを踏まえると、少なくない退所母子世帯は、不安定な就労、低所得、そして子育てと労働との両立の困難を抱えながら生活していることが想定され、そうした世帯で育つ子どももまた困難や不利を抱えていると考えられる。このことが示す通り、母子生活支援施設は入所中だけでなく、施設退所後も含めた継続的な支援が求められている。

しかし、施設を利用した家族が施設を退所後の

のような生活を送っているのか、その実態の把握には至っていない。母子生活支援施設運営指針において退所後のアフターケアは位置付けられているが、目を向けられているのは入所中の支援困難事例に集中し、退所後にまで目が届いていない。施設利用母子世帯も含めて、施設を退所した子どもがその後どのような生活を送っているのか把握できていないのが現状である。施設退所後も一定の不利や困難が想定されるなかで、子どもたちがどのような生活課題を抱えているのかの理解を進めていく必要がある。

母子生活支援施設の利用世帯に関する研究は、入所世帯の抱える個別の困難に焦点をあてた支援の実践に対する分析が多数であり、また母親を対象としたものがほとんどである。利用世帯の退所後に関しての言及はいくつか見られるが、その実態に迫ったものは見られず、子どもを対象としたものもほぼ見当たらない。松原は母子生活支援施設が持つ子どもへの援助に関する役割と機能について明らかにする論稿の中で、「(蓄積してきた) 事例全般が、母親への支援を取り上げたものが多く、子どもへの援助を表題とした事例でも、考察が母親への援助に傾斜する場合も見られる」と指摘している(松原 1999: 39)。また、武藤は母子生活支援施設の今までの研究について、「現在の母子生活支援施設のあり方に関する研究と実践の到達点は、運営指針が示すように母子生活支援施設運営の取り組みの明確化とその内容と効果の検討まで」であり、「そのなかでも、アフターケアや地域支援、地域協働といった対象を施設外におく取り組みは、実践現場が入所中の支援困難事例に集中しすぎていることから有名無実化しがちである」としている(武藤 2015)。松原や武藤の指摘から考えると、入所中の支援困難事例として挙げられる際、それは母親が多く、また子どもに関わる場合でも養育者である母親に着目していることが、母子生活支援施設における研究対象として子どもや退所後の生活に目が向けられてこなかった背景にあると考えられる。また、子どもの援助についても養育者としての母親に着目してしまうことを踏まえると、母子生活支援施設の利用者としての子どもを研究対象とするとき、子どもを当事者としてとらえ、

子どもたちの抱える困難を把握する必要がある。

II. 先行研究

本研究の対象となる母子生活支援施設退所世帯が一定の不利を抱えていることが想定されることは先に触れた。そこで、母子生活支援施設退所世帯の特徴と重なる、経済的な不利を抱えた世帯で育つ子どもについて研究が蓄積されてきた子どもの貧困に関する研究から、母子生活支援施設退所世帯の子どもたちが抱える生活課題を分析する視点を検討したい。子どもの貧困に関する研究分野では、低所得世帯で育つ子どもが生活をする上でどのような不利や困難を抱えているのかの分析が進められている。ここでは特に、低所得世帯で育つ子どもの生活の実態を子どもの主観的な説明から分析をすすめている、Ridge (=2010), 小西 (2003), 林 (2016) の研究をとりあげる。

Ridge (=2010) は「子どもたちの主観的な説明を通して、子ども期の貧困と社会的排除についての子ども中心的な理解を深める」ことを試みている。調査の対象となったのは、「少なくとも六ヶ月以上、低所得補助の受給家族の中で生活していた」子どもたち 40 名であり、彼らへのインタビュー調査から分析を進めている。「子どもたちの日々の生活と体験を焦点化」するにあたり、子どもたちの生活における重要な側面として、①子どもたちの生活の経済的・物質的側面、②学校生活に焦点を当てた、社会的・関係的側面、③家庭環境や子どもたちの個人的な生活並びに家族生活の三つの領域を挙げ、子ども期における子どもが経験する生活上の困難や不利について多角的に明らかにしている。①では、調査をしたほとんどの子どもは十分なお小遣いをもらっておらず、労働による収入によってニーズを支えていた。そして労働による収入は親にお金を貸したり、必要な物品を自分で購入したりすることで、直接的、間接的に家計に貢献していた。②では、子どもたちの半数がいじめを経験し、内何人かは長期間にわたっていじめを受けていたと述べており、友人関係に問題を抱えていた。それと同様に半数の子どもは友人

関係を作ったり、友人関係を維持したりすることに困難を感じていた。友人に会いに行くための移動手段の確保や、周囲にあわせて「適切な」服装を用意することの重要性を認識しているが、そのための費用はとても高いきれるものではなく、プレッシャーとなっていた。学校生活においても、十分に学校生活に参加することは困難であり、子どもたちの半数は費用が高すぎることから遠足や修学旅行に行けなかつた。③では、子どもたちの多くは移動手段と費用の問題からクラブや社会活動に参加できず、家族と休暇に出かける機会も少なかつた。また子どもたちは家庭の経済状況について自覚的であり、ほとんどの子どもは親に高価なものを頼んでも、手に入るとは期待していなかつた。

Ridge が指摘した子どもの生活は、子ども自身の経験から明らかにされたものであり、子どもたちが当事者として生活のどの部分に問題を感じているのかについて理解を進めている。Ridge の示した子どもの生活の 3 つの領域は、子ども期に子ども自身が問題と認識する生活領域であると捉えることができる。

小西（2003）は、子どもの生活全体を把握するには量的調査では限界があることをふまえて、生活保護世帯、低所得世帯の子どもへの聞き取り調査から、彼らの生活習慣や学力、勉強への意識、将来展望について分析を行い、世帯が低所得であるということがどのような形で子ども自身の問題となって表れているのかを明らかにしている。世帯が低所得であるということが、直接的な悩みの原因となっており、また経済的なこと以外でも、転居や転校、家族の離散、集合を経験していた。また、家庭学習の時間がほとんどなく、低学力であり、それによって狭められた選択肢の中で、自身の将来展望を明確に描くことの困難に直面していたとしている。小西はインタビューという手法により子ども自身が自身の生活をどのように感じているのかを示した点で、子どもを主体とした生活上の不利や困難の理解を進めている。

林（2016）は、生活保護世帯の子どもへの聞き取り調査を通じて、家庭生活の内実に着目しながら、子どもたちがどのようにしてそれぞれの進路へと進

んだのかを明らかにし、貧困の世代的再生産のプロセスについて検討している。調査から林は、被保護世帯の子どもたちは経済的に困窮していることに加え、ひとり親世帯が多いために家庭生活の中で家事などの役割を担っていると指摘している。そして、家庭での自分の役割的重要性が高まっていくとともに家庭以外での活動が狭められ、家庭生活での役割が子どもの自己肯定感へと結びついていくとする。そうした中で高校卒業時の進路を決める時期を迎える準備もないままに次の進路へと進む必要に迫られるとしている。林の研究からは家庭生活、特に家庭での子どもが担う役割について子どもの側からの把握が進められており、子どもの生活において重要な視点を提示している。

Ridge、小西、林の研究において、共通しているのは子どもたちの経験の捉え方である。そこでは、低所得世帯で生活することで生じる問題にさらされている受動的な存在ではなく、問題に対して自身も関与し、問題に対応している行為者として子どもを捉え、子どもの生活を明らかにしている。このような子どもの主体性の理解は、生活上の問題を可視化するうえで重要である。だが、子どもたちの行動が社会的な構造からどのような制約を受けているのかという、行動の主体性と構造との関係についての課題がある。

当事者の主体性を認識するという視点から困難を理解する上で、社会的な構造との関係に注意しなければいけない。Lister (=2011) は、貧困についてより理解を深めるような貧困の概念化の議論において、行為における主体性 (agency) の重要性を論じるにあたり、貧困状態にある人々の行為における主体性について、行動の「日常的・戦略的」な次元と「個人的・政治的でシチズンシップに関わる」次元の 2 つの次元で形成された、①日々の対処である〈やりくり〉、②「日常的抵抗」を通じての〈反抗〉、③貧困からの〈脱出〉、④変化をもたらすための〈組織化〉という 4 つの側面から検討した (Lister = 2011: 181-182)。そこで示されたのは、「貧困を経験している人々が自身の生活の行為者であること、しかし多くの場合、強大で抑圧的な構造的・文化的制約に縛ら

れていること、そしてそうした制約自体も、他者の行為の産物であること」であった (Lister = 2011 : 227).

Lister の議論を踏まえると先の 3 つの研究において、特に家庭生活における行為、そして家族という構造をどのように扱うのかが課題であると考えられる。林はそれまでの研究において、「家庭生活での出来事や、そこでの変容に対して十分な検討を行っていない」として、家庭生活の内実に迫る必要性を指摘し、自身の研究においてその点に着目した分析を行った (林 2016 : 37)。しかし林の議論において、子どもの行動と家族との関係を、家事労働を始めとした子どもが担う具体的な役割から指摘しているが、それ以外の行動と子どもの家族への認識との関係については言及されていない。Ridge の調査でもあつたように、子どもが家庭の経済状況について自覚的である場合、具体的な家庭の役割を担っているかにかかわらず、子どもたちは家族の状況に応じた対処を行うと考えられ、子どもの行為の制約となる家族との関係を捉えるにはまだ議論の余地がある。

III. 分析の視点

子どもの生活に迫るうえで、Ridge の研究を手掛かりとして、「子どもたちの生活において重要な 3 つの領域」から、子どもの生活の経済的側面として「お金のやりくり」、家庭生活として「家庭で担う役割」、関係的側面として「友人関係」という 3 つの側面から分析を進める。また、生活における不利や困難は、その将来展望にも影響を与える。そこで、「子どもの将来の認識」についても分析を行う。

それぞれの側面において、子どもの主体性を認識するという視点から、子どもたちの行動にどのような制約があるのかを明らかにする。ここでは、Lister の貧困の概念化の議論における agency の扱い方を参考にして、今回取り上げる子どもの行動や認識にはどのような意味合いをもつのか、またそこにはどのような構造的な制約があるのかを分析する。構造的な制約において、経済的なものに加えて、家族との関係も含めた社会的文化的な制約も考慮する。

具体的には、「お金のやりくり」では、子どもたちが日々使うお金をどのように獲得し、どのように利用しているのかに焦点をあてる。また、家計に関する子どもたちの認識にも焦点をあてる。これによって、子どもたちがどのような認識のもと自身の使うことのできるお金を使っているのかを明らかにする。「お手伝いや家事」では、子どもたちの家庭での役割に焦点をあて、子どもたちが家庭の中でどのように役割を担っているのかを明らかにしていく。「友人関係」では、子どもたちがどのような関係性を構築しているのかに焦点をあてる。「子どもの将来の認識」では、子どもたちがもつ将来展望の形成過程に焦点をあて、子どもたちがどのようなことを考慮して将来を展望しているのを明らかにする。

IV. 調査方法と基本属性

(1) 調査方法

調査は北海道内の母子生活支援施設 10 施設に協力を依頼し、9 施設から以前施設を利用していた現在高校生である子どもを紹介してもらい、11 名の高校生への聞き取り調査を実施した。調査期間は平成 27 年 10 月中旬から 11 月末にかけてである。調査協力への同意に関しては、協力者本人に行うとともに、調査の実施に先立って調査協力者の保護者に調査実施の要項を送付し、保護者の同意書を調査実施日に調査協力者に持参してもらった。なお、調査の実施に当たり事前に「北海道大学大学院教育学研究院における人間を対象とする研究倫理審査」の承認を受けている。

インタビューは調査協力者と実施者の 1 対 1 で行われた。インタビュー内容についてはすべて調査票に記入し、記録を行った。実施時間は 1 時間から 1 時間半を予定し、すべての調査で予定していた時間を過ぎることはなかった。実施場所については、それぞれの施設の 1 部屋を借りて行った。

(2) 対象者と世帯状況

調査対象となった高校生の基本情報については表 1 にまとめた。ただし、調査では 11 名に聞き取りを

行ったが、そのうち1名は母子生活支援施設で生活中であったため、今回の分析ではそのケースを除いた10名のケースで分析を行う。学年別にまとめると、高校3年生が2名、高校2年生が4名、高校1

年生が4名である。ほとんどの調査協力者が現在も母子世帯であるが、2名（B, H）は両親がいる世帯であった。また、Fは祖父母と同居しており、Gは同じマンションで別の部屋に祖母が住んでいる。

表1. 基本属性

識別コード	性別	学年	家族構成	仕事の有無	住居／自分の部屋	家族の健康上の問題
A	男性	公立高校3年	母 姉(就職している)	あり	市営住宅／あり	なし
B	男性	公立高専1年	母 弟(中学生)	あり	学生寮 (母と弟は母子生活支援施設)	なし
C	男性	公立高校1年	母 父 妹(小学生) 弟(幼稚児) 弟(乳児)	父あり 母なし	アパート／あり	弟あり
D	女性	私立高校1年	母 兄(短大生)	あり	賃貸マンション／あり	本人あり
E	女性	公立高校(定時制)2年	母	あり	市営住宅／なし	なし
F	女性	通信制2年	母 兄(大学生) 祖父 祖母 叔母	あり	持家(祖父)	祖父母あり
G	男性	公立高校1年	母	なし	マンション／なし	なし
H	女性	通信制2年	母 父 弟(中学生) 弟(幼稚児・双子) 弟(幼稚児・双子)	父あり 母あり	貸家／あり	本人あり
I	女性	高校3年生	母 弟(養護学校)	あり	アパート／あり	母あり 弟あり
J	男性	高校2年生	母 弟(小学校) 弟(小学校) 妹(小学校)	あり	マンション／あり	なし

今回の調査では1名自分の部屋はないという者もいたが、ほとんどの子どもが自分の部屋を持ち、居住環境の不満は見られなかった。母子生活支援施設では自室を持つことは困難であり、施設利用当時と比べて子どもたちが満足に感じているということもあるだろう。Aは「ここ(施設)にいたので、わかりません」と現在の居住環境が十分かどうか判断で

きないと語っている。ただし、母子生活支援施設を利用することで、ほとんどの子どもが自室を持つ広さのところに引っ越していたのは事実と言えるであろう。

健康状態をみると、本人や母、きょうだいが問題を抱えていることがわかる。こうした健康上の問題は、子どもの活動や家庭での役割にも影響を与えて

いた。

母子生活支援施設に入所した時期についてみると、生後間もない時からの場合（A, B, D, F, I）と小学生の後半から入所した場合（C, E, G, J）の二つのパターンがみられた。また施設を退所した時期は、高校入学前や中学3年の途中の場合（B, C, D, E, G, J）が半数であった。入所や退所にともなった転校の有無については、小学校の途中から施設へ入所した場合はすべて転校もしていた。さらに施設入所以前から数回転校を経験している（C, G, J）ことがわかった。一方で退所時の場合、ほとんどの子どもは転校をしていない。これは退所時に学区が変わらなかつたことや、退所して学区の違う地区に引っ越したが同じ学校に通えるような対応をしていたことが理由に挙げられた。転校した場合は、本人が当時いじめにあっており、本人の希望もあり退所とともに転校を選択していた。

V. インタビューの結果

ここからは、インタビュー結果を先述した4つの側面に基づいて整理していく。表2は、4つの側面で取り上げた子どもの経験を整理してまとめたものである。

（1）「お金のやりくり」

子どもの家庭の経済状態に対する認識について、ほとんどの子どもたちは家庭の経済状態がよくはない感じていた。具体的にはDのように部屋の広さや家賃といった施設と退所後の住まいとの違いから、またはCのように親の生活費のやりくりについて目の当たりにすることで、家庭の経済状態が良くないと感じていた。

D 「いいとは言えない。マンションに住んでいるところ（施設）にいるときより大変で、ここよりも高い家賃払わないといけないから。」

C 「少し父親の収入が少ないので、切り詰めたり、節約したりしています。（父親の稼ぎに応じて）買い物を減らしたり、電気とかガスとか、節電

しています。」一方で日々の生活に不自由を感じていない場合も見られた。しかし経済的に何も問題がないというわけではなく、EとIの語りにもある通り、より大きな支出には耐えられるほどではないとも感じている。日々の経済活動を日常生活とそれ以外とに区別して捉え、より日常生活の維持を重視していることがうかがえる。

E 「そこそこ安定しているんじゃないですか。特別不自由しているわけではないし、生活する分には問題ないので。」「（就職に）固定したのが今年の春ぐらいで、それまでは進学の方がいいのかなと思ってました。専門的な知識を学ぶなら独学では限界があるので、でもお金ないからなと。」「顧問の先生と話した時に、就職してから学びたいことを見つけて大学に入った方が見につくよと言われて、そうだなと思い、それだったらとにかく働いて稼いでからでも遅くはないかなと。」

I 「別に困っていないと思う、生活する分には。でも、最近家賃が高いって言ってて、安いところに引っ越す予定です。（自分が就職して離れるから）私の部屋もういらないよねって、部屋が一つ少ないところに行くみたいです。」「大学に行きたかったんですけど、大学ってお金かかるじゃないですか。弟も多分お金かかると思うし。それで就職にしました。」

こうした認識のもと、子どもたちはお金をどのように使っていたのか。まずお金の獲得について、全員何かしらの方法で自分が使用できるお金を手にしていた。ただし親からお小遣いをもらっている場合、月々決まった金額を受け取っているのは2名で他は定期的にお小遣いをもらっているわけではなかった。ほとんどは必要な時に必要な分を親からもらうことでお金を手にしている。お金の使い方に関して、ほとんどの子どもは手にしたお金を貯金しながら自分の使いたいことにお金を使用していた。Aは月々のお小遣いを上手くやりくりすることで部活動に支障なく参加できていた。Eは貯金しておき、そのお金

をライブへの交通費へと充てていた。A や D から
は、自分が手にできるお金がどれくらいなのかを意

識しながら、工夫してお金を使っている姿がうかが
える。

	「お金のやりくり」			「友人関係」			「子どもの将来の影響」		
	家計状況の認識	お小遣い	アルバイト	使い道	家事の手伝い	付き合いの多い友人	高校の有無	高校進学の時に考慮したこと	卒業後の進路の時に考慮していること
A	よくはない	月5000	なし	本 勉強関係 部活動関係	していない	高校で一緒にクラスになつた友人	なし	小1のとき、高校の前を通り、その後の高校生の姿が結構好きだと思つて、それ以来ずっとそこに行きたかった。	専門にこなした方がいい医療系の大学への進学を目指す。大学選びに窮っている。奨学生を借りることなどつかがが簡単だと聞いて、それを以て来ずっとそこに行きたかった。
B	よくはない	(授業金が5千)	なし	お菓子 友達と遊び 日用品	一	クラスの友達	なし	娘が(以前)高校に行っていて、話を聞いていた。夏休みに見に行ってからでですね(走り屋に決めた)。	卒業後は医療系の会社に就職することを目指し、進路のコースでは生産系のコースを選択しようと考えている。そのコースに進むことができれば、医療系の会社への就職も可能であるといふ。
C	よくはない	(必要な時ある必要なだけ)	なし	勉強関係 友達と遊び	いつもしている (家の世話・服・呂掃除)	中学校から一緒に同じ部活の友達	あり	一番は自分の学力にあった高校。次は中学でやつてた部活動が強いところを。	特にしたいことがなく、進路の先生と相談して。お金で貯めて家計を助けられるように、就職しよう。
D	よくはない	(今まで相談からもうらう)	なし	お菓子 遊び時の交通費	ご飯を作っている	同じクラスの子	なし	現在は就職か進学が迷っています。たまたま進路は複数コースに行くことと考えており、進学するなら医療、就職なら介護系園芸、どちらにこだわるか迷っている。	現在は就職か進学が迷っています。たまたま進路は複数コースに行くことと考えており、進学するなら医療、就職なら介護系園芸、どちらにこだわるか迷っている。
E	困っていない	(CDなどして月に3千から5千)	あり	零に入れる (月額800円から1千)	気まぐれで(やる) 日用品	中学校からの友達と、同じクラスの友達、おじいちゃん 吉仲剛	あり	願の願望である、転勤に対応できるような高校に	ハコン園芸の仕事を学ぶために考えている。当初は専門的な知識を学ぶために進路を考えたが、お金の問題や、先生から聞いてから学びたいことを見つけながらでも選ぶといふことを言わ、ます就職することを決める。
F	よくはない	(欲しいものがある 時、親に連絡して、もらうことも)	なし	お金 履歴書 日用品	基本的に零用金は祖母手伝いで自分でやる (月額780円)	小学校のころクラブ活動仲の良かった友達	あり	(最初の高校は)就職するはずつもりで面接面接に。(転校する時は)あまり人とかわらないところに	進学を考えるところにあるのは、とにかく就職するところを考えていて。お金の問題が主な理由であり、私が進学しているところから自分は進学してお金の問題をかけることはできない。いわゆって自分でやるといふのが、母親のやり取りを通して進学を考えてもいいのかどうか、親は看護系士になりのために進学を考えている。
G	よくはない	(遊びに行き仲間にちょっとついている、約千円)	なし	友達と遊び	あまりたくない 自分の洗濯をする	クラスの友達	なし	友達も行く高校に行きたかったが、学力的にこれだけいけない先生言われて、今の高校に	介護を始めとした医療系の資格を取れる学校への進学を考えている。
H	よくはない	(これまでのお金から)	今はなし (以前はしていた)	漫画 たまに服 遊び時の交通費	結構するねと言われる	中学校で同じ部活の友達	なし	一番は、学力的にどこにもいけないからうつてて、あるいは双子が生まれたので、保育園の迎えとか育てられなければならないのに、あととつぶやくのこともあんまり好きでならないので。	将来のことを考えた時に、なるべくと会える仕事がいいなど思い切らぬが、現実が医療系での就職を考えている。
I	困っていない	今はなし	あり (月6万くらい)	よくする	小学校から同じ学校に通っている友達		なし	強引でできなかつたので、行けるところが2つとか3つしかなくて、その中で行くなら今のところかなつて。	当初は進学を考えていたが、お金のことで、そして隣がいるのでお金かかるといい、就職を考えるようだ。隣からはじぶん進学してほしいと言われていたが就職に決めた。
J	よくはない	(お年玉を貰ったがら)	今はなし	お菓子 ゲーム 遊び	頗もぐらい	高校の友達	2回(小3と小4)	娘の先生から語られて、部活の見学に行き、話題がわかったので。	現在所属する部活動は就職に有利であり、その關係で就職できたらと考えている。特におこだわりはないが、給料が良いといふと考えている。

表2 4つの側面における子どもの経験

A 「月5千円。8月はコンクールと定演があって市民ホールでの練習では、移動でタクシーを使

うんですけど、それでお金がかかるんで。ただ(それを)見越して使っているので、足りなくな

て困ったことはない。」

D 「学校の帰りにコンビニでお菓子を買ったり。」「あと、お金を貯めておいて、月に結構、ライブ（路上ライブ）に行ったりします。」

アルバイトをしている場合は、自分のお金で貯う部分をより大きくしていた。Iは身の回りのものに加え携帯電話の利用料をバイト代から支払っていた。Eは直接親にお金を渡すことで、家計に貢献していた。

I 「服とか、化粧品ですね。それが一番の使い道。携帯代も自分で払ってます。服も言えば買ってくれるんですけど、いくらまでって決まっていて、それより高いときは自分のバイト代って感じです」

E 「まず家にお金入れて、残りは身の回りのものとか。」「（家に入れるお金は）1万円か5千円。渡しても受け取らないので、茶封筒に（1万円と5千円をそれぞれ）入れて、どっちか取れといって渡してます。（親に頼まれているとかではなく）自分で入れています。バイトもそのために始めて。」「（お金を家に入れているが）入れなくても生活できると思う。2人でしか生活していないので、母だけに負担をかけるのは嫌なんですね。母と祖父母との関係もそうゆうのだったんで、お金入れとけば大丈夫だろという感じです。」

以上から、子どもたちは、お金が無いという事実に対して受け手に回るのではなく、家計状況を認識しながら、家族に頼らず自分のお金から出す、もしくは我慢するという形で自ら対応していたことが明らかになった。中には、自らのアルバイト代を活用することで直接的に家計に貢献するという子どもも見られた。ここから、自分の行動が家計に影響を与えることを一部自覚している姿が確認できる。EやIの語りにもあるとおり、日々の生活に影響を与えるような大きな出費に対して親からのお金に頼っていないことから、経済的な制約と同時に家庭生活の

維持という制約も受けていると考えられる。

（2）「家庭で担う役割」

家庭での子どもの持っている役割については、ほとんどの子どもが家事の手伝いを行っていたが、インタビューからはちょっとした親の手伝いではなく、時には主な担い手として役割を引き受け、それが日々の生活に組み込まれていることが確認できる。Hは親が保育園に兄弟の迎えに行けない時には積極的にその役目を引き受けており、その他にも多様な役割を担っていた。

H 「けっこうするねとは言われるけど。洗濯物と洗い物はするし、やれと言われたら掃除機もかけるし、料理もする。お風呂沸かすのは自分の仕事だし、お米炊くのも。料理は手抜きもするけど。料理の買出しまではしないですね、やれと言われたらするけど。」「中学校の頃は、授業中とかはないけど、学校終わってお母さんから電話きて、迎えに行ってって言われたら行つた。学校からも近くて、歩いて5分位だったので。」「保育園へのお迎えは、弟と行ったり、お母さんといっしょに行くのが多いですね。（双子が病気で保育園に行けない時とかは）、学校ない日は私とか、お母さんとか、ばばとか、誰もできない日はベビーシッターさんにお願いするときも。引っ越してからは（シッターを使ったのは）一回くらい。」

Dは食事の準備という、より重要な役目を担っており、それは施設で生活をしていたころから続けられていた。Cも同様に施設にいた頃からきょうだいの世話を引き受けており、それは日常として日々の生活に組み込まれたものであった。

D 「ご飯を作っている。お母さんにお腹すいたといわれたら、自分で作る。洗濯も自分でお米といだりとか。ここ（施設）にいた時から作って、（作るようになってから）結構長いですね。」

お兄ちゃんもバイトない時は作ったり、バイトある日は帰りに食べて帰ってくる。」

C「家事の手伝いはいつもしている。弟（1歳と3歳）の世話と風呂掃除。（部活が終わって）19時くらいに帰ってから、中学のときからずっと（やっている）。特に大変とは思わず、日常ですね。」

家庭内での仕事を主要な担い手として子どもが引き受けている一方で、親に代わり子どもが家事をすることで弊害を生んでいる場合や、親子共に家事を担えていないという場合も確認された。

E「（家事は）気まぐれですね。」「午後から学校に行くので、手が空いていれば（ご飯を）作るっていう感じですね。2人そろうことがあまりないので、いるときは「何食べたい」って聞かれて「何々食べたい」って答えて、（結局）食べないとかありますね。食事に執着しないので、一日一食とかもあります。休日とか二人でお茶とかコーヒーを飲んでいつの間にか寝て一日過ごすとかあります。朝は基本食べないですね。」

J「お母さんが料理できないから、いつもコンビニで買ってきて食べるんですけど、おばあちゃんに料理したらって（自分が）言われて、できたら（ご飯も）楽しくなるのかなって。コンビニに行くんだけど、同じものばっかりになるから。土日とかはおばあちゃんのところで晩ご飯を食ます。朝はあんまり家では食べない。夜コンビニに行ったときに夜ごはんと一緒にいくつかパンを買って、それを持って学校で食べてます。昼は冷凍食品を弁当に適当に詰めてくれるんでそれを食べてます。」

ここから、親の手が回らない部分を子どもが担うことの困難がうかがえる。今回確認された食事場面に絞って考えてみると、食事の栄養バランスや食事を楽しむ習慣は親がその役目を専業していたとしても容易なことではない。その部分を子どもが積極的に担うことは、よりその困難度が増すと考えられる。

ひとり親世帯の場合、家事と仕事の両立は簡単で

なく、家庭の中で必要となる仕事を子どもが引き受けていることは注目しなければいけない。今回の語りからも、仕事との関係で親が担いきれない、もしくは担うことが難しい家事労働があるということが分かる。こうした親が担いきれない家庭内での役割を、子ども自身が担うことで家庭生活を維持していることが明らかになった。そして、家事における役割を担うということは、部活動もあるなかで役割を引き受けているCのように、子ども自身も親同様に家庭外の活動との両立が求められるということである。

（3）「友人関係」

よく付き合う友達として同じ学校に通う友達を挙げる場合が多く見られた。Cの語りから、同じ学校に通っている事と共に、同じ時間を共有する機会が多い友達を挙げていることがわかる。

C「中学から一緒に3人と、クラスは別で、同じ吹奏楽部です。」「こっち（部活の友達）の方が（クラスの友達より）仲がいいかもしれない」

一方で通信制高校や定時制高校に通っている場合、同じ学校ではなく、以前通っていた学校でできた、別の高校に通っている友達を挙げていた。通信制高校の場合、学校のシステム上友人関係を構築することが難しくなってしまっていることが分かる。

F「転校した先の小学校からの友達で、ミニバスで仲良かった子ですね。中学校も一緒に、高校も前の学校では一緒にでした。」「（今の学校は）火曜と日曜どっちも行つても、どちらかだけ行つても、行かなくてもいいので、いつ行っても同じ人にあわなくて、あれあの人いないとかよくあります。」

友人関係の形成と維持にかかわる機会の一つとして部活動が挙げられるが、その部活動への参加自体に困難を抱えてしまった場合も語りからは見られた。D, Fの語りから、学業の問題、健康の問題、人間関

係での問題を抱えたことによって、部活動の継続が困難になり、時には転校にまで至っていた。

D 「中学校で吹奏楽をやってたけど途中でやめました。一度部室でてんかんで倒れて、勉強もできなかつたから、(母に) 辞めて勉強しなさいって。一度休部して、テストで言われた点数を取れれば続けられたけど、取れなくて(辞めた)。」「吹奏楽部は続けたかった。」

F 「(転校したのは) 部活やってたんですけど、部活の先生に目を付けられたというか、言い争いになって。」「それで、人付き合いというか嫌になつて、あんま人と関わらないところがいいと思って、通信制に。」

部活動への参加での躊躇から転校に至る場合が見られたが、今回の調査対象者には、母子生活支援施設への入所と退所のタイミングがあり、そこには転校が伴うことが考えられる。今回の協力者のうち転校を経験していた子どもは、先述したように、4名で、うち3名は転校を複数回経験していた。転校に伴い友人関係を新たに形成していく時に問題があつたという語りは見られなかつた。一方で、友人関係の形成において転校がいい機会となつたと捉えていた場合もあつた。Fは転校することで人間関係を一度リセットし、新しい友人関係を形成することが可能になつていた。

F 「前の学校(小学校)ではうまくいつてなかつたので、(転校してからは上手くいきました。(上手くいつてなかつたというのは) いじめにあつて。(転校して) 自分も変わろうかなという感じで。」

以上から、友人がいないという子どもは見られなかつたが、中には友人関係の形成と維持において難しさを抱えている子どももいることが明らかになつた。また「お金のやりくり」、「家庭で担う役割」で見た結果を踏まえると、友達との交際費の捻出や時間の確保を容易なものと捉えることは難しい。

Ridge (=2010) の研究では、子どもたちが友人関係の形成と維持において仲間と会うための移動手段や適切な服装の用意が重要であると認識していたことを指摘されたが、先に見た「お金のやりくり」の語りのなかで、Aは部活動への参加のための費用を自分で管理しているお金から捻出し、Iは自分のアルバイト代で服や化粧品を用意していた。友人関係の形成と維持においても、家計状況と家庭生活による制約があることが示唆される。

(4) 「将来に対する認識」

まず進学する高校を選択する際には、自分の持つ学力、高校での部活動、親からの要望、人付き合いの少なさといったことを考慮しており、これらの要素を複数考慮したうえで高校を選択していたことが確認された。Gは志望していた高校には学力の面で進学が難しく、教師との話し合いの末現在の高校に進んでいる。

G 「最初は違う高校に行きたかったんですけど、勉強してなくて、先生にこれだと行けないと言われて、今の高校にした。」「最初行きたかった高校は、友達で行く人も多かつたので、自分も行きたいなど。」「今の高校は、先生にそこぐらいしかないんじゃないじゃないかと言われて、じゃあそこにしようと、私立は受けないで、公立一本でと思っていたので、選択肢が少なかつた。」

親の仕事の都合から、親の要望に沿つた進学を行つている場合も見られた。

E 「今通つている学校とは別の学校に行きたかつたんですけど、親に転勤するかもしれないから、その時に手続きがめんどくさくない高校に行つて欲しいと言われて」「今通つている学校は定時制の3部制の学校(午前部)。」「特に(決め手とかは)なく、その学校以外に知らなかつた。」「あとは通信ですけど、通信するぐらいなら、定時制通つてその近くでバイトしたほうがいいなと思つて。」

Jは中学に所属していた運動部の先輩からの紹介で興味を持ち、学力的に難しかったものの進学を果たしている。

J「俺、高校のこととか全然分かんなくて、どうしようかなと思ってたんですけど、中学の先輩に話したら、うちのどこに来いよって言われて、お前なら野球で来れるからって。」「それで見学に行って、監督にいいなって言われて、はじめ特待で行けることになったんですけど勉強の方がダメで、それだと特待ではできないってことになって。」「でも特待はできないけど、単願なら優遇してやれるからそれでも来て欲しいって言われて、学校にも（監督の先生）2、3回話に来てくれて、それで今の高校に行きました。」

また、前節で部活動でのトラブルから転校にまで至ったことについてのFの語りについて、転校の際に考慮したことについて改めて見てみると、Fは人付き合いの多寡も考慮に含んで進学先を考え、現在通っている通信制の高校への転校を決定していた。

高校卒業後の見通しの形成については、二つの傾向が見られた。一つは、自分が将来就きたい職業を軸としながら、それに向けてどのようなアプローチをしていくのかを考えている場合である。Dは進学か就職かで迷っていたが、将来的には介護福祉関係の仕事に就きたいと考えており、そのことを軸として将来に対する展望を描いていた。

D「就職するか、大学に行くかで迷って。」「（親からは）大学はお金掛かるからだめと言われます。」「お兄ちゃんは、高校の先生に相談して、その高校から兄の通う大学に進学すると最初のお金、入学料？が安くなるということを教えてもらって、それをお母さんに伝えたら、じゃあ行ってもいいよ、ってなった。」「自分がこれから進むコースが福祉コースで、そこに行ったら資格？がとれるから、就職できたら介護の仕事に。」「大学にいくとしたら、短大にでも行って、保育士になりたいと思っています。子どもが好

きで。」

Aは、教師になるために進学を目指しているが、進学後の費用については奨学金を考えており、さらに卒業後の返済を見越して在学中からアルバイトで返済費用を貯めておく必要を感じていた。

A「吹奏楽は大学では考えていません。」「バイトで忙しくなりそうだから。」「奨学金も返さないといけないし、お金を貯めておきたいのでバイトをしないといけないので。」

もう一つは、高校卒業後に働いてお金を稼ぐかどうかを考え、そのうえで自分の就く職業を考えている場合である。Iは当初進学を考えていたが、お金のことや、障がいを持つ弟にも今後お金がかかるなどを考慮して将来について考えていた。母親からは進学を望まれていたが、最終的には就職することに決めていた。Cは、家計の助けになればと、卒業後は就職を考えている。Fはきょうだいが進学しており、自ら家計を配慮して高校卒業後は就職しようと考えていた。Fの場合は、家族とのやりとりを経て、調査時点では進学を考えていた。

I「最初の頃は進学を考えて、（大学に）行きたかったんですけど、大学ってお金かかるじゃないですか。弟も多分お金かかると思うし、それで就職にしました。」「決めたのは高2の終わりぐらいですね。」「ママは、進学したいのであればしたらいいって言っていて、むしろ進学して欲しいって言わされました。」「ママと話して、お金かかるよねって言われ、奨学金もあったんですけど、後から苦労するって言われてるじゃないですか。」「そこ（内定をもらった企業）にしたのは条件が一番良かったからです。」「学校の決まりで最初の面接はひとつしか選べなくて、それ以降は複数出来るんですけど、ひとつしか選べないなら一番条件がいいそこにしようと。」
C「就職してお金を貯めようかなと。」「高校の進路の先生と話して、したいことがなかったので相

談したら、こういうところがいいんじゃないかと勧められて.」「(お金を貯めようと思うのは)家計を助けられるかなと思って.」「特に何か言われてではなく、自分で考えて.」「(家族が)何不自由ない生活ができたらなど。切り詰めたりしているので.」

F「最初の高校は商業高校だったんですけど、すぐ就職するつもりだったので、そこに決めました.」「(最初の高校進学のとき、すぐに就職と思っていたのは)経済状態を考えて.」「兄が進学したので私は就職したほうがいいのかなと思って.」「(高校卒業後進学しようと考え始めたきっかけは)親子喧嘩ではないんですけど、みたいなをして、親が『誰も就職しろなんて言ってない』って言われて、お互に冷静になって話し合って、進学してもいいんだよってなったので.」

「お金のやりくり」、「家庭で担う役割」で確認されたことは、子どもの将来に対する認識の形成にも関係していると考えられる。「お金のやりくり」では、家計状況に考慮していたことを、「家庭で担う役割」では、親が担いきれない部分を引き受けることで家庭生活を維持していることを確認した。これらは、家計もしくは家庭生活に与える自身の影響を無視できずにいることを示している。そして同じ様子が将来に対する認識の形成においても確認できる。自ら部活動に必要なお金をやりくりしているAは、進学にかかる費用についても自分で何とかすることを考えている。家庭での役割を持っているCは、就職することで家計に貢献できるのではないかと考えている。さらにIとFの語りからは、親の意向とは関係なく家計、家庭生活を意識していることが確認できる。ここから、将来どのようにするのかを考える時に、費用の調達が可能かという経済的な制約だけでなく、お金のやりくりや家事を担う場面と同様に、今後の家計を含めた家族の生活への影響を考えていることが示唆される。

林(2016)の研究においては、離婚や再婚等を通じた家庭の養育機能低下にともない、子どものもつ家庭における役割が大きくなること、それによって

家庭への準拠を強めることを指摘しているが、今回の語りでは、家事労働を積極的に子どもが引き受けている場合だけでなく、一般的なお手伝いや、Aのように家庭でのお手伝いをしてない場合でも家族の状況への考慮が見られた。この結果を踏まえると、家事労働を積極的に担う状況に無くとも、子どもの行動や認識は家庭状況の制約を受けていると考えられる。このことは、「お金のやりくり」で確認された、自分の行動が家計に影響を与えることを一部自覚しているということと、将来に対する認識の形成とに関係があることを示唆している。

VI. まとめ

本研究では、母子生活支援施設を退所した子どもの退所後の生活について、子どもたちがどのような経験をし、それらはいかなる制約を受けているのかを明らかにしてきた。家計状況を考慮してお金を使う、親が担いきれない家庭での役割を引き受ける、という子どもの主体的な行動によってある程度安定した生活が維持されていた。しかしそれは、家庭の状況を考慮するという制約のもとでの行動とならざるを得ない。このことは友人関係の形成と維持においても、難しさを与えていた。そして、今の生活だけでなく、将来に対する認識の形成においても、将来における家計状況や家族の生活を考慮したものとなっていた。

今回の調査では、家庭の経済状態の認識において安定しているとする子どもも一部いたが、総じて家計に余裕が十分にあるという認識ではなかった。そうしたなか、子どもたちの行動は経済的な制約を受けていることが確認され、先行研究で指摘された知見と重なる点も多く見られた。母子生活支援施設を退所したといえども、一定の経済的な制約を受けていることが明らかになった。

その一方で、家庭内で具体的な役割を担っているかにかかわらず、子どもたちの行動は家庭の生活の維持を意識したものとなっていたことも明らかになった。子どもが家庭の経済状況をどのように認識し行動しているのかということと、将来の認識に対する

る形成との関係が示唆された。このことから、今後は、実際の家庭の経済状況に加えて、子ども自身が家庭の経済状況と生活状況を理解しているのかも、子どもの将来に対する認識を形成する制約を考察する上で重要となると考えられる。

文 献

- 小西祐馬 (2003) 「生活保護世帯の子どもの生活と意識」『教育福祉研究』9, 9-22.
- 堺恵 (2013) 「母子生活支援施設の利用世帯における入所理由の分析」『龍谷大学大学院研究紀要. 社会学・社会福祉学』20, 69-78.
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会 全国母子生活支援施設協議会 (2015) 『平成 26 年度全国母子生活支援施設実態調査報告書』
- 林 明子 (2016) 『生活保護世帯の子どものライフヒストリー - 貧困の世代的再生産』勁草書房.
- 松原康雄 (1999) 「第 2 章 母子生活支援施設に生活する子ども」松原康雄編著『母子生活支援施設 - ファミリーサポートの拠点』エイデル研究所, 35-42.
- 武藤敦士 (2015) 「施設数現象からみた母子生活支援施設の研究と実践の課題：戦後母子寮研究からの示唆」『立命館産業社会論集』51, 105-124.
- Ridge, T (2002) *Childhood Poverty and Social Exclusion : From a Child's Perspective*, The Policy Press. (= 2010, 中村好孝・松田洋介・渡辺雅男訳『子どもの貧困と社会的排除』桜井書店.)
- Lister, R (2004) *Poverty, Polity*. (= 2011, 松本伊智朗監訳『貧困とは何か—概念・言説・ポリティクス』明石書店.)